

楽  
曲  
紹  
介

10/17 | 10/20 | 10/21

10/17  
10/20  
10/21  
ビゼー (1838-1875)

## 交響曲第1番 八長調

解説=安川智子

歌劇『カルメン』でよく知られるフランスの作曲家ジョルジュ・ビゼーは、『カルメン』が初演された1875年に36歳という若さで亡くなったことから、生前は不遇の作曲家であったようにも語られる。しかし本日演奏される交響曲第1番 八長調を作曲した学生時代のビゼーは、きわめて優秀で、師匠（ジャック＝フロマンタル・アレヴィ）の覚えめでたく、順風満帆なエリート街道を約束されたかのようだった。兄弟子のシャルル・グノーからの影響は甚大で、1855年に初演されたグノーの交響曲第1番 二長調をピアノ用に編曲したビゼーは、同年に自身の最初の交響曲を書き上げた。

1850年代のフランスは、サン＝サーンスの交響曲第1番 変ホ長調（1853）を初演したサント＝セシル（聖セシリア）協会や、指揮者ジュール・パドゥルーが立ち上げた若手芸術家協会（後のコンセール・ポピュレール）など、管弦楽の演奏団体が次々と創設され、メンデルスゾーンの交響曲やシューマン、ワーグナー、ベルリオーズの序曲などが演奏されるようになっていた。ビゼーはそのような恵まれた環境の中で、古典派の書法に習熟し、さらに後の劇音楽を予感させる管弦楽法も身につけたようである。2年後の1857年にローマ大賞を受賞したビゼーは、オペラ作曲家としての一步を順調に踏み出した。ローマ留学から帰国後の1861年には、師匠アレヴィ主催の晩餐会<sup>さん</sup>でフランツ・リストに会い、リストの難曲を初見で見事に弾いて驚かせたとの逸話も残っている。その曲とはグノーの歌劇『ファウスト』（1859年初演）のワルツをピアノ用に編曲した、リストの「歌劇『ファウスト』のワルツ」（1861）である可能性が高く、青年ビゼーはまさにグノーの後を追って飛躍せんという時だった。忘れられたビゼーの交響曲第1番は、作曲から80年近くが経った1933年に手稿譜が再発見されたことにより、ようやく

我々の知るところとなったのである。

全4楽章の典型的な古典派式交響曲である。そのなかでも、第2楽章でオーボエが訴えかけるように奏でる美しい旋律や、モチーフ(主題となる旋律断片)を組み合わせながらクライマックスを築く劇的構成力など、すでにビゼーらしさが随所にみられる。

第1楽章(アレグロ・ヴィーヴォ)、ハ長調、2/2拍子。

第2楽章(アダージョ)、イ短調、9/8拍子。

第3楽章 スケルツォ(アレグロ・ヴィヴァーチェ)、ト長調、3/4拍子。

第4楽章(アレグロ・ヴィヴァーチェ)、ハ長調、2/4拍子。

【作曲年代】1855年(10月29日着手～11月完成)【初演】1935年2月26日 パーゼルにて。フェリックス・ワインガルトナーの指揮による

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

やすかわともこ(音楽学)ノパリ第4大学メトリーズ課程および東京藝術大学博士後期課程修了。博士(音楽学)。専門は19世紀～20世紀初頭のフランス音楽。現在、北里大学一般教育部専任講師、昭和音楽大学大学院・上智大学非常勤講師。共編著書に『《悪魔のロベール》とパリ・オペラ座 19世紀グランド・オペラ研究』(上智大学出版、2019年)、『ハーモニー探究の歴史思想としての和声理論』(音楽之友社、2019年)ほか。

リスト(1811-1886)

## 『ファウスト交響曲』LW-G12(S.108)

解説=野本由紀夫

フランツ・リストが1854年から1857年にかけて作曲した、男声合唱とテノール独唱付きの交響曲。演奏時間70分もかかる大曲である。ワイマール古典主義の文豪ゲーテ(1749-1832)の金字塔、戯曲『ファウスト』にインスピレーションを受けて作曲した。

### ●ゲーテの『ファウスト』

ゲーテの『ファウスト』は、1万2千行にもおよぶ韻文体(詩)文学だ。第1部は1808年に、第2部は1833年に出版された。

主人公のファウスト博士は老齢で、すべての学問を究め、あらゆる知識を得たにもかかわらず、人生の満足感を得られない。そこで、魔術を使って悪魔メフィストフェレス(略して、メフィスト)を呼び出す。若さを取り戻す代わりに、ファウストはメフィストに魂を売る契約をする。ファウストは少女グレートヒェンと恋に落ちるが、彼女は彼の子供を身ごもり、非業の死を遂げる。ここまでが、第1部。

第2部は、ギリシャ神話の世界への旅などである。最後にファウストが「時よ止まれ、おまえは美しい」と叫び、メフィストとの契約で地獄に落ちるかと思われたそのとき、女性的なるものの力でファウストは救済され、天へと召される。

### ●『ファウスト交響曲』の成立

リストの交響曲は、ベルリオーズ(1803-1869)との交友関係から生まれた。

ベルリオーズは、『ファウストの劫罰』(1846)が1854年に出版されるに際して、親友リストに献呈した。これが引き金となって、リストはこの年の8月から10月にかけて一気に呵成に300頁あまりの『ファウスト交響曲』を書き上げた。

初演は1857年9月5日、作曲者自身の指揮によりワイマールで行われた。その後、1861年までに細かな改訂が行われ、現在の形になった。こうした経緯から、『ファウスト交響曲』はベルリオーズに返礼として献呈された。

### ●ストーリーを語らない、リストの標題音楽

リストの標題は、音楽の内容ではない。リストにとって音楽の内容とは「詩的観念」であり、ストーリーではない。事実、『ファウスト交響曲』の副題は「3人の人物像」あるいは「3つの性格像」であり、ゲーテの『ファウスト』のストーリーを音楽で描こうとはしていない。

**第1楽章「ファウスト」** 30分弱もかかる大規模なソナタ楽章。冒頭は、1オクターヴ内に含まれる音すべてを使った「12音主題」だ。すべてを知り尽くしても満たされないファウストを象徴するのであろう。この楽章では、博士の性格の多面性が、音楽で心理的に描き出されていく。

**第2楽章「グレートヒェン」** 15分強の緩徐楽章。室内乐的で、きわめて美しい音楽だ。リストがメロディ・メーカー(美しい旋律を思いつく才能に恵まれた人)だということを如実に示す楽章だろう。音楽は大きく3部分からなる。

**第3楽章「メフィストフェーレス」** 15分強のスケルツォ楽章。この楽章の特徴は、独自の主題がほとんど存在しないことだ。もっぱら第1楽章「ファウスト」に出てきた要素のパロディだけでできている。これは、メフィストフェーレスがギリシャ語で「光を忌み嫌うもの」ということを象徴もしていようと、ファウストがじつはメフィストの存在と表裏一体だということも示していよう。

音楽がいったん静まると、終結部の「神秘の合唱」となる。

**終結部「神秘の合唱」** 7分ほどの終結部。ゲーテの『ファウスト』第2部から、最後の「神秘の合唱」の詩に作曲した部分である。オルガンまで使った荘厳で崇高な響きは、天が悪に打ち勝ったことを示す。

ファウストの魂を救ったのは、グレートヒェンの自己犠牲である。だから、「永遠に女性的なるもの Das Ewig-Weibliche」というテノール独唱の歌詞は「グレートヒェン主題」で歌われる。最後は、第1楽章にも出てきたメロディが低音部で奏されて、ハ長調の大音響のなかで気高く閉じられる。

リスト：『ファウスト交響曲』第3楽章より「神秘の合唱」 対訳＝野本由紀夫

Chorus Mysticus	神秘の合唱
Alles Vergängliche	移ろいゆくものはすべて
Ist nur ein Gleichnis;	写し姿にすぎない。
Das Unzulängliche,	手にできないようなものが
Hier wird's Ereignis;	ここで出来する。
Das Unbeschreibliche,	筆舌に尽くしがたいことが
Hier ist's getan;	ここで実現された。
Das Ewig-Weibliche	永遠にして女性的なるものが
Zieht uns hinan.	われわれを天へと引き上げてくれる。

【作曲年代】1854～1857年、作曲(初稿)。1861年、最終稿完成。【初演】1857年9月5日に、作曲者自身の指揮により、ワイマールで行われた。

【楽器編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(シンバル、トライアングル)、ハープ、オルガン、弦楽5部、男声合唱、テノール独唱

のもと・ゆきお(音楽学)／桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部教授(音楽史、鑑賞理論、指揮法)。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」監修、同「ららら♪クラシック」の解説者、Eテレ学校番組「おながくブラボー」番組委員。NHK-FMラジオ「オペラ・ファンタスティカ」レギュラー解説者。2年連続で1000人の第九をパシフィコ横浜で指揮。